

# オペラ本場で道開く 魂の半生

伊名門で指揮 常呂生まれ吉田裕史さん自伝

イタリア在住のオペラ指揮者で名門のモデナ・パヴァロッティ歌劇場  
フィルハーモニー音楽監督を務める吉田裕史さん(57)は北見市常呂町生  
まれが半生記「魂の音楽よ、日本に届け」を書き下ろした。敬愛する  
指揮者小澤征爾に励まされて欧州で長く「音楽武者修行」を積んだ経験  
から、若い読者に挑戦を促す内容。戦禍にあるウクライナで国立オペラ  
サ劇場首席客演指揮者も務め、「国境を越えて平和を訴える音楽の力  
も伝えたい」と熱く語る。

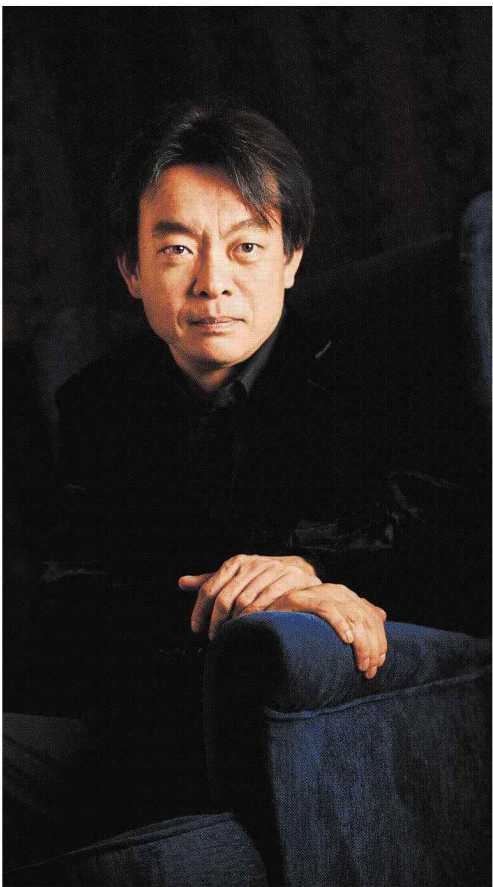
千葉県育ちで、中高時代は吹奏楽に  
打ち込んだ。1986年、小澤とボス  
トン交響楽団の東京公演に感激し、終  
演後、勢いのまま楽屋を訪問。指揮者  
になりたい、と訴えると、30秒ほど目  
をのぞき込まれて「本気だね。タンゲ  
ルウッド(米国の世界的な音楽祭)に  
来るといい」と言われたことが、励み  
になった。

東京音大指揮科で、歌曲と交響楽、



「魂の音楽よ、日本に届け」(ミツイパブリッシング)

舞台が融合した総合芸術であるオペラ  
に魅せられ、99年、文化庁派遣の在外  
研修員として渡欧。ドイツを拠点に準  
・メルクル、ロリン・マゼール、ユー  
リ・テミルカーノフら巨匠の教えに触  
れた。  
オペラの6割はイタリア語作品。2  
002年、イタリアに拠点を移し、戦  
後イタリアで「オペラの守護者」とさ  
れたフランチェスコ・エルナーニ元ロ  
ーマ歌劇場総監督の知遇を得た。エル  
ナーニ氏は「オペラがある限りイタリ  
ア文化は不滅だが、イタリア人だけで  
はこの芸術の水準を保つことは難し  
い」と、国外からも人材を見いだして  
育てていく考えの下、吉田さんの背中  
も押してくれた。



「世界に挑戦する若者にバトンをつなぎたい」と著書を書き下ろしたオペラ指揮者吉田裕史さん

## 欧州武者修行、ウクライナ客演 音楽の力 次世代に

吉田さんは、西洋音楽を学ぶには日  
本人に見えにくい文化背景や関連性を  
掘り下げてこそ「本物」になる、が持  
論。イタリア・オペラの源流とされる  
18世紀バロック・オペラを踏まえた上  
で19世紀のベルディ、20世紀のプッ  
チーニを理解するように努めた。

またオペラは古代神話・叙事詩や中  
世文学の題材が多く、ラテン語・ギリ  
シャ語由来の語彙や歴史的修辭につい  
て、15年以上、現地大学教員から個人  
授業を受けている。

こうした努力で07年にローマ・カラ  
カラ浴場跡の野外オペラを指揮。これ  
以降も、イタリア屈指の名門、ボロー  
ニャ歌劇場フィルハーモニー芸術監督  
就任(14年)などオペラの本場で日本  
人初の快挙を続けた。

今の目標は大きく二つ。一つは本場  
イタリアでさらなる高みを目指す。「メ  
ジャーリーグの扉を開いた野茂英雄の  
ように日本人オペラ指揮者として道を  
広げ、イチローや大谷翔平のような次  
の世代が登場する未来を導く」。もう  
一つは日本語を主要な言語とし、日本  
の文化と西洋の舞台芸術を融合させ  
て、世界中の歌劇場で上演されるよう  
な純日本産オペラを世に送り出す。イ  
タリア、ドイツ、オーストリア、フラ  
ンス、ロシアに次ぐオペラ芸術大国に  
したいという。

ウクライナ・オデッサでの指揮を通  
じて「音楽には平和や友情を伝える力  
がある」と信じる。21年の首席客演指  
揮者就任時は約100人いた楽団員が  
今や70人程度。徴兵で顔なじみの楽団  
員の多くが戦死した。「彼らと紡いだ  
魂の音楽を届けていく」

同書はミツイパブリッシング(旭川)  
から刊行。2420円。(山本哲朗)